

## 復活節第4主日礼拝

2023年4月30日（日）

題 「イエスの思い」

テキスト：ヨハネによる福音書20章24～29節

皆さま、おはようございます。

先週日曜日は洲本教会の総会でした。その後、教会学校の教師会を行いました。その後のこと、講壇の前のお花にステンドグラスからの差し込んで来た光がお花に当たり輝いていました。コロナ禍で洲本教会だけではなく、日本各地の教会も厳しい状況を過ごして来ましたが、きっと光は差し込んでくるのではないかと思います。慰めを与えられました。

さて、今の今日の聖書箇所には、復活されたイエスと12弟子の一人であるトマスとの復活後の再開と会話が記されています。

### ◆イエスとトマス

24:十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

イエスがよみがえられた日の夕方に、そのお姿を弟子たちに現された時、弟子のトマスはそこにいなかったのです。このトマスは双子であったと言われています。トマスがどういう理由でいなかったのかは聖書は語っていません。イエスを裏切って自害したユダは別にして、トマスだけが他の弟子たちと共にいなかったのです。

わたしたちに置き換えてみても「共にいる。」ということ。また「共にいない。」ということは人間関係に問題を引き起こすことがあるのだと想像します。時に寂しさ悲しみ、苦みや憎しみ、不満や怒りさえももたらすこともあります。同じグループ内の人間関係に破れを起こすこともあると思うのです。

イエスが現れた時、トマスはいなかったということが、トマス自身の心に問題を引き起こしたかのようです。

25:そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、

トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

トマスの心は頑なになったようです。

そして「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」とさえ言

いました。

この頑なさの原因は、もちろんそれ以前のトマスの気質や性格、生育歴などにも関係していることがあるのかもしれませんが。

聖書の解説でよく言われることは、トマスはわたしたち現代人に似ているということです。

実証主義ということばがあります。実証主義とは、哲学用語で知識の対象を経験的事実に限り、その背後に超越的実在を認めない立場のことのようです。つまり、現実だけを重んじ、自分が自分の目で見て確認したことしか信じないという立場のことだと思います。ですから、近代の自然科学だけを重んじると、復活は信じない対場となります。トマスはそのような人物だと思えます。

26:さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

イエスは8日の後に再び弟子たちに姿を現されました。一週間前と同じように部屋には誰も入ってこれないように鍵をしっかりとかけていたのです。しかし、イエスは入って来て弟子たちに真ん中に立ち、「あなたがたに平和があうように。」と語りかけられたのです。今回はそこにトマスもいました。イエスはトマスを見て、いやこの時は、トマスだけを見つめてと言った方がよいでしょう。

27:それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

イエスは、トマスからも誰からの聞いたわけではありませんでしたが、トマスの心をすべてご存知だったのです。これは神さまは、すべての人の心をご存知だということです。弟子たち一人一人の心を、ひいては、ここにいるわたしたち一人一人の心をご存知なのです。自分ですら気づかない心の内をすべてにご存知なのです。なぜなら神は創り主だからです。ですから神をあなどってはならないのだと思わされます。ついわたしたちが口に出したことばも、心の思いも実現することがあるのだということです。語ることばの重さを思わされます。この時、主イエスは、トマスの求めをすべて聞かれ受け入れられたのです。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。」ここまでして主イエスはトマスに真剣に向かい合われたのです。

そして、最後に「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」と言われまし

た。ここにはイエスのトマスへの深い思いがあったと思います。弟子たちへの思いがあったのです。このイエスの思いにトマスは心打たれたのだお思うのです。科学を超えたイエスの熱い息吹をトマスは心に受けて、主イエスの力に圧倒されたのだと思います。

28:トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

29:イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

聖書によればこのトマスは実証主義者であったと共に熱血漢でもあったようです。

たとえば、聖書のヨハネによる福音書の 11 章には、有名なラザロという人の死の出来事が記されています。イエスが知っていた病気であったラザロが住んでいたユダヤのベタニアの村には、イエスの愛した家族、ラザロと姉妹、マリアとマルタが住んでいました。イエスはヨルダン川の向こう側におられましたが、ラザロの重い病気のことを聞いて、ベタニアの村に行こうとされました。ベタニアは地域としてはユダヤ地方になります。しかし、この時イエスの弟子たちは「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で殺そうとしていたのに、またそこへ行かれるのですか」と必死にイエスにユダヤに行くことをやめさせようとしたのです。その後、ラザロが死んだことを知ったイエスはベタニアに行こうと決断されました。

ベタニア行きを恐れていた弟子たちの中で、ただトマスは、仲間の弟子たちに「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と櫓を飛ばしたことがヨハネによる福音書 11 章 16 節に記されています。トマスは、こうと思ったら一途に行動する人物でもあったようです。

28:トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。 29:イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」と。トマスはイエスに出会ってトマスのままで変えられたのです。イエスのことばを信じる者へと大きく変えられたのです。そして、わたしたちもイエスの愛の息を受けて変えられるのです。

このトマスについては、聖書には書いてはありますが、初代教会が生まれた後に、今日のインドにまで行ってイエスの名を伝えたという、一つの伝説が残っています。その後の正統的なキリスト教会では、異端とされている新約外典の一つに、「トマスによる福音書」というトマスの名のつけられた書物もあります。そしてトマスはインドにまでイエスの名を伝えたという言い伝えもあるのです。インドではトマスはトマと呼ばれたという記録もあるとのこと。

このトマスもイエス・キリストの名を伝えた人物として覚えて起きたいと思わされます。イエスにつながる弟子たちや多くの証人（あかし人）のいることを感謝します。そして今、わたしたちがいます。同じイエス・キリストにつながっていることを共に感謝しましょう。

やがて時が来て、洲本教会の礼拝堂に神を礼拝する人たちが満ちて行くこと、教会の外に、神の愛と正義と平和を求める人たちの満ちて行くことを祈りつつ、励みたいと願います。

皆様の上に主の平安を祈ります。 共に黙想しましょう。